

第五分科会

電信・電話と情報の世界史

厚木東高校 小島 正

一、「情報」というもの

一九世紀後半の電気通信技術の発達が追い風となって、二〇世紀は「情報の世紀」といわれ、情報が「人・もの・金」を結びつける網（ネットワーク）の役割を果たしてきた。国際化が進む現代世界にあつては、情報技術の発達は経済のグローバル化を加速させ、世界の一体化を促進させる。

情報にはさまざまな性質がある。冒頭で、「的確な情報の有無」が人の生死を分けることがあるということを、沖繩戦（一九四五年）における「二つのガマ（壕）」での出来事を紹介し、情報の特質を考えてみた。

もう一つの特質としてあげたのが、戦争それ自体は、「情報獲得」戦争の意味合いが強いということである。発表では、ナポレオン戦争における情報の軍事上の役割を明らかにした。また、現代世界との関連性を意識して、ロスチャイルド家の債権市場における情報獲得と情報の利用についても説明した。

二、一九世紀の歴史の中で、「情報」を考える

一つの技術の確立は、社会に新たな変化と役割をもたらし、さらに上位の技術開発を加速する。そのような事例を二点にわたって説明した。一九世紀後半からの電気通信革命を跡づけていく中で、情報が社会に及ぼした影響を整理した。さらに「口コミ」という情報伝達の手段について、伝える側の意思疎通（コミュニケーション）

のあり方や文化の問題を、インド大反乱を手がかりに考えてみた。教室でも電車内でも携帯電話でつながる人と人との情報のやりとりは、「口コミ」という伝達手段そのものだろう。そうした機械仕掛けの「口コミ」（携帯電話）によって、伝達のスピードは格段に早まっている。これが新たな変化を生じさせる。

三、電気通信革命の展開―電信・電話の発明

モールス、ベル、エディソン、マルコーニ。彼ら四人は、一九世紀の前半から後半にかけて、技術の高度化がそれほどでもない段階において、発明や実業に関与した人々を取り上げた。生徒に「調べ」学習させる絶好の人物であろう。

四、国家政策の中の情報―軍事・帝国主義政策

イギリスのロイター通信社の登場に注目した。通信社による世界各地のニュース速報は、商業・金融業界を活性化させ、大英帝国の発展（植民地支配）へとつながっていった。ここでは、通信網の発達という情報技術の観点を加味して発表した。

新聞・ラジオ放送など情報メディアによる情報の大衆化についても論じ、時に大衆は「受け身」情報に慣らされる危険があることを跡づけた。

五、情報操作を考える

情報メディアの発達によって、情報操作は今まで以上に現代的なテーマになったといえる。旧ソ連のスターリンもドイツ帝国のヒトラーも、この虜になったのだから。

二一世紀の「情報文明の世紀」の進展は、情報についてどのような変化や問題点が生じているかなど、生徒に考察させる必要が迫っているということなのだろう。

第五分科会

兵器から見た戦争の実像

平塚農業高校 根岸洋史

今回の全歴研神奈川大会で私が行った発表は、兵器という「道具」を切り口に戦争を如何にして捉えるかという、いささかシヨッキングな一ある意味では意欲的とも言える一ものであった。

しかしながら、今になって冷静に振り返って見ると、肝心の焦点が絞りきれない研究発表となってしまった観があり、第五分科会にお集まりいただいた先生方には、大変申し訳なく思っている次第である。

私がこのテーマを初めて世に問うたのは、一九九八年度歴史分科会春季研究発表会のことであるが、これを思い立った動機とは、軍事の本質を何ら理解しようとせずに、戦争や平和を論じようとする我国の各界の現状への疑問。また兵器・武器への認識不足に起因する戦争上の「神話」―その代表例は長篠の合戦での鉄砲の三段撃ちであるが―や、旧日本陸軍に対する無責任な批判の横行に対する不満。そして、ややもすれば感情論・情緒論的な方向に流されてしまっている「平和学習」の在り方への懸念、などである。

二〇世紀イギリスの著名な戦史研究家であったリデルハート卿の言葉に「真に平和を欲するのならば、まず戦争を理解せよ」というものがあるが、これはけだし名言であろう。則ち、「平和主義者」とは、戦争や軍事の言わばプロフェッショナルである軍人以上に、戦争の実際や軍事の本質を理解しておく必要があるのである。

しかしながら、この見地に立って、我国の「平和主義」の在り方

を考える時、大きな疑念を禁じ得ない。

特に学校教育の場では、こと軍事に直結する話題を持ち出すことへの抵抗感が強い上、これを事実上タブー視する傾向がある。

しかし、生徒たちを戦争・軍事の本質から遠ざけたままで行われる「平和学習」で、戦争の愚かしさや平和の尊さを、本当に理解させることは可能なのであるか。即ち、戦争の本当の恐ろしさや愚かさを理解していない人間は、目の前に当たり前のよう存在する平和の有難さや尊さを理解出来なくなってしまうのである。

そこで今回、私が兵器という「道具」を通じた戦争史の検証を提言したのは、感情論や情緒論的な方向に流されること無く戦争や軍事の本質を見据えると同時に、主観的な要素が介在し難い技術史的な立場からのアプローチによって、より客観的に戦争の真の姿を見詰めようと思いついた次第である。

しかしながら、これには克服すべき課題も多い。まず先述したように、従来タブーとされて来た軍事に直結する話題を教育現場に持ち込むことに、如何にして理解を得るか。また、日常生活から縁遠い「道具」である兵器の性格や、その恐ろしさなどを如何に生徒に理解させるか、などである。従って、私自身このテーマでの授業実践は行ったことがないし、また行う目処すら立っていないと言おう、言わば「消化不良」の状態にあるというのが実情である。

しかし、今回のこの「消化不良」の研究発表が、今後の平和学習や戦争史教育の在り方に、何か楽しい要素を付け加えるものになってくれるとしたならば、これは私にとって望外の幸せである。